末黒野

すぐろの

末黒野
平成二十四年一月五日発行　第六十七巻第一号（通巻七八五号）

1月号（通巻785号）

椎の実

小川玉泉

白妙の絹めき明けの酔芙蓉

雨至り酔半ばなる酔芙蓉

地にこぼれ金木犀の描く円

日にまみれ金木犀のこぼれ花

仏壇の片隅夜半の鉦叩

台風に耐へたる紫苑咲きにけり

炊き上げし新米の香を供へけり

せせらぎや秋海棠の終の花

椎の実の叩く木椅子に憩ひけり

街なかの苑の静寂や椎拾ふ

大名の庭の団栗拾ひけり

地を覆ふ青き蘚苔木の実降る

秋酣

松本三千夫

こころ足るまで佇みぬ大花野
虫残る置石のうら草のかげ
袈裟懸けの傷二ところ種茄子
秋耕のふたりの間合ひ富士小さし
秋天や漢字一字の墓増えて
転た寝のペン取り落とす虫残り
頁繰る指先にある夜寒かな
秋うらら寄れば固まる女子高生
身に入むや母を呼ぶ子の変声期
大石を抱く大杉天高し
西めざす風に君逝く秋深み（妹の夫君死去　二句）
ひややかや珈琲をもて口湿らせ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

北陸路

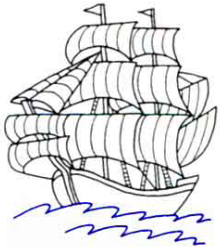
田中臥石

ひと口の良夜の酒を許されよ
新米を捧ぐや姉の震災死
刈田より巴に翔べり雨の鷺
一部落一寺秋霖走りけり
柿貰ふ大津や京都素通りし
海へ出て福井も涯のあきつかな
顧みる秋の夕日の親不知
紅葉づるや春日山城史跡径
草臥れて石に腰置く枯葎
秋風やつい手軽さの電子辞書

露

大橋伊佐子

蜩や湖北に多き古戦場
日照雨過ぎ花野の色を深めけり
人影の絶えし高原濃竜胆
柿二つ机上に子規を祀りけり
草の露にくるぶし濡らす湖畔道
蔓引きて枝ごとの露浴びにけり
虫の夜や言葉を選ぶ見舞文
再読の句集に灯下親しめり
忌を重ねなほ恋ふ母や実紫
風の棕梠夜寒の音を鳴らしけり



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

秋深む　熊切光子

磐石の居坐る沢や赤とんぼ
夕映えや金の垂り穂の粟畑
水にほふからくれなゐの曼珠沙華
掘割の濁りや葛の花垂るる
参道に火の束を生み彼岸花
内陣の灯籠の百秋深む
蓑虫や点すことなき常夜灯

秋澄めり　堺昌子

望月やひかりと翳のビルの黙
声援や空のはてまで秋澄めり
紅白の花を交互に萩の道
村の名の残る碑昼の虫
もみぢせる枝垂桜や手にふれて
園児等のそろひの帽子小鳥来る
ひとり居の折鶴の数夜の長き

雁渡し

鈴木一三

爽やかや能楽堂の稽古笛
雁渡し近くて遠き生家かな
聞き做しの口笛に寄り四十雀
数珠玉や谷戸の水車の鈍き音
稲刈りの泥塗れなる親子連れ
家苞に買ふや掘りたて落花生
がまずみの熟れて真つ赤や日を返し

小草紅葉

西川みほ

夕日映ゆ小草紅葉や杖の先
裏作や婆のほまちの花畑
牛膝まみれの子等や無人駅
秋の蚊のまとふ名園苦吟の歩
聞き流す愚痴や敬老日の酒宴
樹林より色なき風と鳥の声
旅空の帰燕を案ず空模様

露の径

松田泰子

鶏頭の影濃き道をふるさとへ
山鳩の声のぬけゆく露の径
秋灯に橋の浮き立つ梓川
南瓜から苦労話の始まりぬ
身に入むや水底に揺れ己が影
爽涼の椅子に朝刊匂ひけり
喪帰りの雨の野菊は手折るまじ

蔵町

森清堯

地のゆがみ覆ひ尽せり真葛原
小鳥来る綺羅を増したる池の面
掃苔や絆一字の深き彫
鉤の手の菓子屋横丁鰯雲
蔵町の路地の湿りやちちろ虫
地の火照りやや鎮まりぬ今日の月
どこまでも花野からりと蒼き空

青炎集

小川玉泉選

横浜　太田良一

浮子ならべ居間に海呼ぶ夜長かな
休む田の空の深さや捨案山子
あんぱんを買うて旅寝の子規忌かな
うそ寒や連れなき駅のカップ酒
曼珠沙華水の涸れたる水車小屋
敬老日手話もて捧ぐ主の祈り

横浜　河合とき

炊き上げて甘き匂ひの今年米
菊膾酢の香の満ちて夕厨
若き日の自画像飾り吾亦紅
色鳥や図鑑繰る手のもどかしく
竜胆へ風は意のまま峠道
秀野忌の秋の時雨となりにけり

横浜　浅川幸代

秋草の名札大きく百花園
風よりも雲のうつろふ芒原
見失ふ風の行方や芒原
漱石を読み返しをり夜長の灯
肌寒や薬飲む白湯やはらかく
野分あと夜の孤独を深めけり

横須賀　大川暉美

金木犀針の運びに匂ひ来る
雨かぜの後の青空大根蒔く
新築の杭打つこだま秋澄めり
岩鼻の浪立ちあがる月明り
雨あとの光る雫や竹の春
ひさびさに来たる子に炊く栗の飯

横浜　今泉あさ子

爽やかや手入れ済みたる庭の寂
町会長の懐メロに酔ふ敬老日
史料館は古戦場跡昼の虫
願掛くる峯の薬師や初紅葉
目覚めよく台風後の庭掃除
身に入むや妣の長着の納戸色

横浜　三橋玲子

虫の音のいつしか途絶ゆ流し元
故郷や早生の蜜柑の出荷時
雨催ひ残んの色の萩括る
噴煙の浅間の山やもみぢせり
浅間より富士へ流るるいわし雲
稲刈りの子らの歓声実習田

横浜　岡野里子

晨鐘に目覚むる暮し秋気澄む
重陽や雲をあみだに十日月
白日の寺生垣の白芙蓉
肩朽ちて笑まふ羅漢や堂の冷え
秋光を集めて沖の漁舟
雁の列雲染むる日の赤あかと

横浜　波多野孝枝

人肌に温めし銘酒婿に注ぐ
和太鼓の連打の決まり運動会
笹刈りし跡に叢立ち曼珠沙華
母の忌や朱の鬼灯を供花に添へ
雨意兆す風の匂へる晩夏かな
夕に誦す経の間合ひを鉦叩き

横浜　渡辺崖花

天と地の融け合ふ牧や赤のまま
山荘や妻恋ふ鹿の闇深し
餌漁る鹿の来てをり背戸の闇
嶺々囲む木曽の台地や豊の秋
復興の二文字大書や秋祭
健診の円く納まり十三夜

横浜　上月智子

しなひては戻る芙蓉や夕野分
百歳の杖無き媼青瓢
木犀を散らす雨音独りの飴
秋の灯や筆の擦るる再生紙
鳴り渡る夕焼けこやけ鰯雲
望の月見つ禁煙を破る夫

巨林抄

花すすきはらりと生けて蛇笏の忌　渡辺絹代

吹き抜けの寺の百畳萩の風　椎名文子

秋の蚊や露座の仏の胎の中　正谷民夫

婚の荷に忍ばせておく今年米　太田チエ子

落鮎の化粧塩濃しいろり焼　遠藤清子

褪せ暖簾間半めし屋の焼秋刀魚　山口郁子

投入れてみても淋しき芒かな　芝田幸恵

野仏の膝にアルミ貨秋日和　斉藤マキ子

墨の香の筆遊ばせて十三夜　伊藤平八

りんご剥く紅きリボンを解くやうに　細島孝子

野分川木端の如くカヌー行く　谷口律子

せせらぎやくるぶし濡らす草の露　内田三郎